

小笠原島紀事

卷之十二

十四

農商務省
圖書
第七〇三號
共三三冊

太政官文庫
和書門
八二七
三三
三二
三二
類號函架冊

內閣文庫
和書
八二七
三三
三二
三二
類號冊架

內閣文庫	
番號	和 8174
冊數	33 (14)
函號	173 180



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak



小笠原島紀率卷之十二

目録

七月三日佛公使小笠原島ハ日本輿地圖ニ所見ナシ

因テ経緯度詳細ノ因且ツ武鑑翻訳請求ノ来翰

同書翰写

同日英公使ヨリ最前町贈ノ小笠原島規則蘭文訳

請求ノ来翰

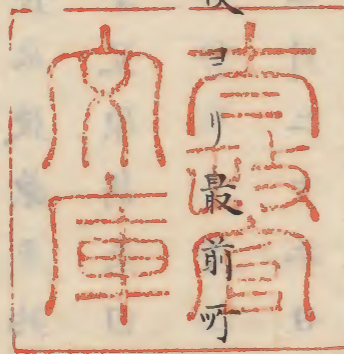
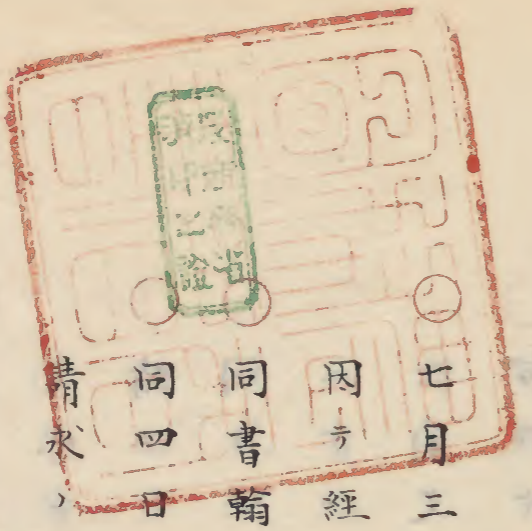
同書翰写

同十七日享本回ハ開拓報知ノ書翰並公使ハ委託贈

達ノ報告及ヒ進送料請求之来翰

同進送料収領書

同日佛公使ハ過日彼ヨリ小笠原島地圖請求ノ来翰



二回答ノ草案
 ○同二十一日佛公使小笠原島事件ニ就テ閣老ニ面略
 ヲ請フ来翰
 ○同二十二日佛公使ハ面略ノ日時ヲ定メシ回翰
 ○同二十七日佛公使兼テ約束ノ如ク此ノ日板倉防州
 カ邸ニ面略小笠原島来由ヲ説ク公使再ニ規則書ヲ
 請フ
 ○同日洋曆茅七月二十五日附十八号日月二十八日附
 二十二号ノ回答并ニ彼カ請求ニ随ヒ書面翻譯英文
 ヲ蘭文ニ直シ之ヲ遞与スルノ回答
 ○同二十六日忠徳常統カ小笠原^島巡視ノ賞典ヲ行ハル
 ○八月三日右日断随行李ニ軍艦方等ハ賞典

○同五日去月二十七日勝静カ邸ニテ佛公使ト對話ノ
 時約セシ港規則ヲ本日外国奉行一名ノ添書ヲ以テ
 贈達
 ○同書翰
 ○港規則
 ○同七日勘定奉行ヨリ蕪山縣令カ属吏小笠原島ハ差
 遣ス旨之申稟
 ○右縣令カ属吏八丈島民ノ内移住説諭注視崖略書
 ○同移民ハ賜品目錄
 ○同十五日縣令属吏八丈島ニ残り移民ヲ外国方ハ
 交付ノ覚書
 ○移民ノ内選萃注視并ニ手當金授与等ノ注視書

○同二十六日朝陽艦再々小笠原島ニ入港外國方監系
 方醫師及之移民男十五人女十五人并ニ出稼、大工
 五人木挽一人鍛冶職一人糸組者嶋
 ○同二十七日去月二十七日並書記官へ前ニ字國政府
 へ書簡遞達ノ費用投与ノ申稟
 ○同書翰案
 ○閏八月日附田中廉太郎ヨリ移民居小屋造立并ニ井
 戸新掘等ヲ始メ遠方地所新墾ハ暫見合北袋沢一門
 伐開南袋沢起込地味の當ニ諸品植殖食料ノ余分ハ
 勿論今般種植之果物生費セハ外國人へ貿易一件或
 ハ芭蕉布織立等ノ業ヲ開キ總テ移民共懶惰不取締
 ヲ戒メ又々植付ノ蕃薯ニテ燒酎釀製及之食糧ヲ禁

カセ釐ハ甲ノ佳品ナルハ江府ニ搬運シ其肉ハ油ニ
 製スヘキ較計其ノ他臭油ノ製方ノ詮議女子ハ相應
 所業童男女者芭蕉布ノ絲績ヲ教メ男女老幼ニ至ル
 マテ閑居ナカラシムヘキ旨教件ノ下知ヲ傳達ノ覺
 書
 ○阿部將翁教種ノ草木果物菜蔬及之藥種等ヲ携來植
 殖ノ較計
 ○同四日五民セームス病ニ因リ出島他國へ轉住ニ就
 所其ノ所有ノ諸品政府ノ買上ヲ願願
 ○同人願書
 ○同月日附田中廉太郎母島へ渡航同島五民マツレヘ
 對談シ其他ノ便利ヲ計リ移民ヲ引分ケ渡サシ旨ヲ

決議シ出帆然レトモ先父島一所開墾ノ交切立テ後
 山姑ノ此事ヲ止ムルニ在リ
 ○同十四日中濱万次郎君沢形船ハ乗鯨澳ヲ先務トシ
 閑暇ハ通作ヲモ兼役シ且ツ捕鯨ノ方術ヲ移民等ハ
 傳達サセシ車ヲ兼テ上申ノトコ日本日許可
 ○右請書
 ○就右事件並山縣令ヨリ勘定所ハ伺書
 ○君沢船ハ小形ニシテ捕鯨不便利因テ別段捕鯨適宜
 ノ船雇入ノ申稟
 ○同九月九日小笠原島在苗ノ官吏議シテ移民使役ノ
 方法ヲ定ム
 ○右議定書

○同月二十八日先是並山縣令ヨリ中濱万次郎小笠原
 島捕鯨一條ニ付越後村松濱平野廉藏船採用ニ付教
 件之申稟有之本日指令
 ○右申稟書
 ○同指令
 ○同月中朝陽艦小笠原島ニ滯泊病テ船中ニ死亡ノ水
 主五名各同所奥村谷川ノ奥先前死者葬地ニ埋葬
 ○十月九日在島官吏換地シテ移民ハ畑地ヲ分与
 ○右坪教書
 ○同二十六日兼テ小笠原島ハ滯泊ノ魯船指揮役ヨリ
 其ノ船ノ水夫脱走ノ報知及ヒ島中警非違ノ諸吏ニ
 捕縛依頼及ヒ病者上陸加療許可ヲ許フノ旨在嶋ノ

官吏へ来翰

○就右小花作之助ヨリ西條承允ノ返翰

○同二十九日在民コルソンス居宅ヨリ奥村ノ方陣濱

ノ地ヲ官吏換地シテ貸与へ聞望ヲ許容ス

○右拝借証書

○十一月十九日先是中濱万次郎鯨漁中心得ノ稟議ヲ

呈セシニ本日稟維

○右指令

○文久三年ノ上

○正月七日小笠原島出張両弓官吏等議シテ移民及ヒ

出稼職人等ノ休暇ヲ改定ス

○同九日平野船小笠原島へ着港中濱万次郎捕鯨主宰

松浪権之丞林和一郎等移民捕鯨修業トシテ衆組曰

所出帆鳥島へ至リ日本属島ノ札ヲ建

○同札因

○同二十一日去年十月五日於小笠原島在民キルリ

暗殺セラレ其殺害人探索ヲ命シ救回但セトモ因循

有無ヲ不告因テ本日平野船一同徴出糺明ス

○同島民稟状

○三月九日並回鯨漁船ノ水夫脱走船長捕縛ヲ小笠原

島在廳吏へ依頼

○同書翰

○同月日時不詳並回鯨漁船脱走水夫三名小笠原島官廳ニ

自訴ス其突士官等ノ苛酷ニ出法ヲ敗ルハ不輕ト雖

氏 皇國ニ對シ有罪ナラ子ハ規則書ヲ讀聞セ請書

ヲ為サシム

○同請書

○五月朔日平野船小笠原島退帆松浪權之丞林和一郎

亞人スミス及ヒホーツンニ名ヲ台連歸府罪人一件

此レハ干

○同九日朝陽艦三度小笠原島入港在島諸吏及ヒ移民

等引押、下知達未

○諸吏退散、崖略

○官宅及ヒ諸品諸般殘穀等島民ハ領与

○種殖ノ草木藥品等培養ヲ島民ニ遺托

○廳舎ノ蹟ヲルイイスレツワリニ托ス

○同人保状

○島民等ハ投与スル所ノ家屋及ヒ諸品并ニ諸般等收

受且ツ向後小笠原島ニテ困難ノ日本又ハ便船有之

迄扶助スヘク將夕岡壘碑及ヒ冥福碑ノ兩碑并ニ墓

地等大功ニ守護スヘキヨシノ請書

○セムスマツレシ出島ノ時所有ノ諸品御買上ヲ申

稟ノ横文原文交還

○同訳文

○移民開拓地ハ十余坪ヲ在島外國人ニ委託

○同十三日朝陽艦小笠原島出帆在勤諸吏及ヒ移民一

同引押

○同十九日朝陽艦品川海帰港諸吏歸府

○七月日時不詳菊池伊豫守上申シテ小花作之助益田鷹之

助松浪權之丞及七医師阿部將翁ヲ賞典ヲ請フ

○同上申日時不詳菊池伊豫守上申シテ小花作之助益田鷹之

○阿部將翁賞典之上申日時不詳菊池伊豫守上申シテ小花作之助益田鷹之

○十一月日時不詳竹内下野守菊池伊豫守連署シテ小笠原

島開拓費用殘金返納、申稟、

○此書中二小笠原島書籍悉皆焼失、事ヲ詳ニ載セ

○同十五日江城本丸北隅ヨリ出火柳宮焼込此時小笠

原島事件書類悉皆灰燼ニ属ス

○元治元年日時不詳菊池伊豫守上申シテ小花作之助益田鷹之

○月日未詳外国奉行連署シテ小笠原島向後ノ處分上

申入

此書未文惜ムヘシ結局未詳

小笠原島紀事卷之十二

同^{文久}二年七月三日佛國公使書翰ヲ進出シ小笠原島ヲ載セ

シ皇國輿地圖ノ所見ナリ因テ經緯度ヲ明細ニ書載ス

ル所ノ地圖及^レ從前制禁ノ諸本且^ツ武鑑等ノ翻譯許可

ヲ請求ス

千八百六十二年第七月二十八日^{第六日}江戸

外務事務宰相台下、呈請

余小笠原と名津の島の本を託せざる書翰と落しせり

其考中、決島ハ日本島の南方と^レし其時の名ハ余

所考也^レ日本地圖ニ^レ名^ハ以^テ且^ツ台下の考考中、經

緯云々示^ス以^テ取^ル小笠原告知を公小探里用^ニ得^ル考

余^ノ考意を述^ス一^レ乃^チ以^テ其說明を聞^クら^レと^テ得^ル以^テ裁^ス存

より更に星の説明を第小関ふなる一
台下より此書の回答を答ふを直に此事件の回答を送
る一
余此を台下に讀ふ第小日本新領の西武を以て精神な
る書件を答ふに一其前を著し我々の高船武を軍
艦日本に不領する事明かする此小上陸する小南で
滋難を遊ルんるものあり
各下第小書玉の獲得を以て記する地圖を答らハ
已小第小をへる台下の求りて遂に一此地圖及び書
札の詳著し書玉武艦の存を為すと書くと採り其
同及び政府の詳著の取子に因り我々人謀に役臣諒の業
小と助くを秘用の通年者と妨くるものと書き我々願を但

一此輩を其政府へ此玉の極子を著す答る一其人有り
改羅巴より日本使節ハ此書よりチブロマチーテ
使節に採子より決して其支名をあたふ一其チブロ
マチーテ使節より我々より日本使節より一其チブロ
マチーテの爲め其採自由を許せしむるものと要領あり其
取ハ其玉より採り其書玉を著し其通年者を使用
するに其西海諸玉と日本と採り其採り其採り其採り其採り
生活色を著し其採り其採り其採り其採り其採り其採り

トゼントレルクル手記
フレッキマン 譯

小笠原系時経緯云其が経緯は緯度七度七十分二
 十八分我ら日附之運路落手其道を鎮守里小笠原崎を
 一名吾人崎西洋時唱フロソヒスヘアイニスと北緯
 二十六度三十二分より二十七度二十五分英西東経一
 百四十二度六分より二十分の間小笠原門崎之嶺を其
 時訪折之我西地圖之小笠原より南東越さきしハ定る
 志水と云る之の、若きし地圖ありし者も市中賣醫
 以る因小笠原小刊折せし之のふきを己色の寸見の及
 小笠原記せし其地圖を筆をあたふ能くして僅くハ大崎
 の傍小笠原一云此より南小笠原の崎ありよしを記載せ

一あり此市中賣の地圖程多りきとも能くおとを荒
 浜の地小笠原より下を彼より詳小笠原此を界する之のふか
 えより我西鎮守の風物其のふか、市匠製り者小笠原
 相を其後小笠原一云逐一其西人より地圖を求めらる
 、之のふかを此程より其節之のふか、今西の地圖
 乃以浜海の浅深周囲之廣義経緯の度程其詳悉し其を
 梓小笠原の目論見ありし其事ありし其を其のふか
 示す、小笠原系を今般水野路落手其地巡検之御事
 く測量せしめ、ふか不日是を梓小笠原の中間一般小
 公示せんと其の所を第一本と稱する其のふか、了了解
 波訪各武鑑之図より其秘法其のふか、此ハ巨細
 明示おとひなを存以て其のふか、其のふか、其のふか

原遷之領地ある日小換り目小改り此を一振、并明一
の島一武治候の款并に警備持場亦く参向方過日寄与
法の者より辱せしる已了知法此一事と訂せり
將に御旨不足之儀、付あり申越色一を赤方小切ひて
も公私に用便者小差支多ル此を其節之者一移り申付
生徒教養迄ら此を漸次学業事懇之に八便用自在と
得る小至る一し此際回答申入る御旨候儀

文久二年八月日

昭 坂中勢大 補
水 野 和 泉 守
松 倉 岡 防 守

此書亦夕書翰取扱ニ載セス若未達中次ニ載スル意
接ニ漏シ歎又ハ此頃小笠原島務ハ南島掛ニテ掌リ

同 旧記食ク島有トナレハ今詳ニスルニ所有ナケレハ
姑ク之ヲ省

同 二十一日佛国公使左、書ヲ贈リテ面晤ヲ請フ是小笠
原島事件ニ因テ也

千八百六十二年第八月十四日江戸佛菜西使臣誌

外 丞 奉 勢 宰相 台下
余 謹 言 下 上 何 此 の 日 會 合 也 一 手 也 之 を 知 せ 給 也 一
を 介 丞 奉 勢 宰相 台下、糸と尻一し

佛菜西令權ニニストル

文 庫 山 田 一 手 記

同 十 三 日 佛 菜 西 令 權 一 手 記

素より自主之交通小柳坊燈丸一書規則之條を内崎へ
差せ一灰分回車等形格の—書面先小松達書—如と
互譯の英文難解故に付則常文小松直—差進—灰百右
にて了解有之奉々存灰右二通—區差如新—灰梓々謹
言

文久二年戊七月廿二日

暇坂中務大補

水野和泉守

板倉周防守

同二十六日今年三月小笠原島ヨリ帰府シタリシ忠徳常
純三賞典ヲ行ハル

金十五枚
時帳四

水野筑後守

金十枚
時帳二

部一

小笠原晴法閣格考法用序成者於灰に付請下之

右芙蓉間ニ於テ閣老列座周防守勝静演達參政侍坐ス

同八月三日小笠原島ヨリ帰府ノ布衣以下及ヒ拜謁以下

ノ諸夾ハ賞典ヲ行ハル

銀三十枚

浅羽早次郎

小十人
小十人
小十人

金二枚
時帳二

小野五郎

金三枚
時返二

外玉奉行支配調役

田片左五右衛門

清動定

深山字平太

外玉奉行支配調役並

田邊左一

清後目付

信友五郎

小笠原晴開拓為所用系被寄折及之侍下之

右於右筆部屋縁類閣老列坐勝静演達参政侍坐不

後目付ハ燒失ハ間ニ於テ演達先例ナリ此席ニ出ス

ハ持格ニヤ本書ノ終ニ載ス

多本條下品
記載あり

小野友五郎

小笠原晴海岸ニ分測臺ニ依移分寄折及之侍下之

右於日席再上呼出シ勝静演達参政出雲守堀之敏侍坐不

清目見持移

清目見持移

清目見持移

鈴木之物

寄合医師

蕙麻徳領

小野峯卷

金二枚

清目見持移

清目見持移

清目見持移

銀二枚

吟代和三部

小笠系崎乃用張成岩坊之付下之

右於鄴蜀間參政出生遠江并加納久徵演達又

金拾五兩

富田達三

介五奉少在砵
考為用出役

金拾兩

須菱珠一郎

曰

江川右路在門地鉄炮方手付
法善隆淨持

金拾五兩

中濱万次郎

戸田希め正泉來

宗伴善子
澤善洞行務因洞役

銀三枚

宮中元道

小笠系崎乃用張成岩坊之付下之

右於檜間曰新曰人演達又

同日勝靜曰明奧山金阿弥ヲ以テ左ノ書ニ通テ軍艦奉行

一通与又

法軍艦奉行

銀五枚

紫澤一

銀三枚

塚本桓輔

銀三枚

近藤悠吉

銀三枚

松岡盤吉

銀二枚

高橋 榮司

銀三枚

豊田 隆

銀七枚

杉浦 金次郎

銀七枚

法軍艦方下役

銀七枚

矢野 澤次郎吉

右之者小笠原崎人乃所用器械者其及之付者其美
とて考而之通法下所習者其後之請申達候

成八月

法軍艦幸候

銀七枚

坂本 桓輔

銀五枚

松岡 盤吉

曰

豊田 隆

右之者小笠原崎海客之介測量之儀柄別券紙其
付乃法艦美其面之通法下所習者其後之請申達候

成八月

曰五日先月二十七日勝静カ郎ニ於テ佛蘭公使面晤ノト

キ小笠原嶋ニテ忠徳常統等カ極メシ所ノ規則書ヲ後日

遊与セシ旨ヲ約ス因テ日本外国奉行伊豫守菊池隆吉一

名ノ書翰ヲ以テ規則ヲ贈ル其ノ書左ノ如シ

其時港規則ノモテ贈リテ島規則ハ贈ラサリシニア小

元権典事カ筆記中ニ所載港規則ノミナレハ姑ク擬之

佛蘭西全權之ニストル

成八月

日時太郎在工門ノ属吏八丈嶋ニテ移民ヲ説諭スルノ概
畧

八丈嶋役人一同ノ宗初ノ謀及口上方意
此八丈島ヨリ凡九百八十里程已ニ方ニ南リ小笠原嶋
ト申當此至味開小在米屋ト付人ノ好里トハ丈嶋ヨリ
引移ラ取計方被作也方男於古人女於五人何事也
丈嶋及ニテ小笠原嶋ニ引移レ灰名古撰ニテ申立云撰
ニ引リ灰トノニ至味南ト一テ分紙書付ニ通人毎ニ
被下ニ被嶋ハお酒灰後田畑切付テ植付灰米麦等分
毎分ニお米五物織立七出来灰色ハ上ヨリ米麦味噌等
油等介ニ食物ハ勿論居小泉住仕着ト是七被下至御方

ニ証牙バあり灰名古撰美華ト被下ニ此嶋人ノ関和
トお米後ノの世ヨリを神代ノ人ニ被教テ申被履ニ付
要加ニ程難有也年ハ人為思香トのとお撰ニテ申涼人
等々此由ハ加ハ難一丸トハよめを言フハ灰名古撰一
並灰標ニ笑一テ之の多見ト七人物ヨリ一ト灰名古撰一
テ夫婦ハお米交換ミ重トおトミおトハの通添也也一
テ中着一男子を連テ引移リお色のをめ所也一可お米
女子を携む一女子を連テ引移リお色のをめ又め所
ミをテ中男子を言フハ更テ言連灰大工花者銀治磯子
お心得灰名古撰十人出稼ト一テ此家言連可申灰名古撰
右撰可申立在一口の灰名古撰何程取載被言奉取礼一テ
申立灰

前口以

後口五個 在常代五人 子孫世
引文八五 時之 物至代り 以之 子
女 迄 未 有

前口以

後口五個 在常代五人 子孫世
引文八五 時之 物至代り 以之 子
女 迄 未 有

吉村

前口以

吉村

左 右

左 右

以 四十三

藤 三十二

右 三十

重 三十五

下 四十

共 五十四

可 四十

吉村 四十

四 十四

小 十六

右 四十一

左 三十五

常 十三

女 十

三 二十七

右 二十

本橋松

日方工

三根村

忠 左 史

共 四十二

外 三十六

八女島村

宇津市村年寄

内宿弟

小久右衛門

多井村

民 五郎

ノ人数三十八人

右ハ八女島出而此類人数之内より今般小笠原崎一係

引移可取米福民若之出稼之由共其面之通引海軍等以

戊八月十五日

江川左衛門

川崎俊平

江川左衛門

上井村善平

卯玉方

秋田 秀神 辰

西目付方

原 又 吉 辰

覺

右如島村

孫助

三根村

直左郎

吉吉村

共七

中之白

三八

桂立村

信吉

右之考有良家之丁差御有之振地召人有内洞中寸及

一出稼八人之考一日一人銀三分五厘之、家料之

分以子當請下及之付持八丈金五兩之、招借古案

左趣杉田雪補より申す之也外仕事ハ多ク及節ハ

右海金ハ不為五百姓ハ勿論船方也七公海路在及趣

申出

日二十六日朝陽艦再上小笠原島へ着港外国奉行支配調

役田中廉太郎定役松田晋輔日心金坂賣之助徒目付富永

一造小人目付原又吉医師阿部将翁兼組渡島八丈嶋へ立

寄移民男十九人女十五人大工五人木挽一人銀治職一人

ヲ連来ル

日二十七日去月十七日小笠原島開拓事件ヲ幸国政府へ

報知ノ書翰送達費用ホル下人ニ申立ノ書意評議ヲ遂ケ本

日外国奉行連署ノ書ヲ以テ閣老へ呈ス

申上及書付

外王所用立合得

一 秀送り北ノ書翰落子先日我外五奉替執政より李漏
旨改存一ノ書翰而方今許周旋治訪一ノ旨委茲以洋厚意
之取扱重く謝以不齒ノ状状賃ト一ノマキシトトル
ラル十四枚四十セント号存子許より拂送至一此にて
形脚世信人エル一之受取書を派申出られ一即ち致
之如く返宛切一以居留落子治訪云及下總守轉致一付
此如致答おす以居譯之

文久二年戊八月三十日 葡地伊藤守

稟状ノ通指令有ニ因テ曰三十日此ノ書翰ヲ達ス
本文ホルトマン一祈托ノ李国政府一ノ書翰紫書苗十
キハ前ニ云フ如シ按スルニ前ニ載セシ忠徳常純カ稟
議ノ書ニ添ヘシ西国公使一ノ書翰曰文ナルヘシト考

フレ其ノ証トスヘキモノナケレハ今可否ヲ定ムル

トヲ得ス

日 閏八月 田中廉太郎小笠原島へ渡航左ノ件々ヲ示談ス

一 福民共存小笠原島取建訪之止法品因露湿氣を防及探取

建訪之事

一 恙一也暴風博波有者一若揚訪取扱一若存去退處一

一 万有本軍軍之系至風深一ノ一若揚訪一取建之事

一 井堀場之事

右ハ出稼人等在在度内夫一若懸及探訪存存事

一 遠方之地處起運等一若勢至心儀得一併一伐実一

後南能洋起運一地味の苗一治品核付食料一ノ余分一

灌種杜冲二本 土伏苓二株 生省藤二株

○吳萊萸二本 延胡索二株 銀合歡二本

金合藤二本 巴豆一本 肉豆冠一本

尚小 杉苗千本 椴木二百本

松苗千本 槲木二百本

檜木五百本 枳苗二百本

右ハ後便ニ送り渡ス下ヲ托シ出帆スト云リ

閏八月四日在任セムス病ニ依テ小笠原島ヲ去リ他国

ニ轉任セン為メ其ノ所有ノ諸品政府ハ買上ヲ願フノ書

ヲ出ス

一子八百六十二年第九月廿七日

日本政府役人ハ

一抄考セムスモイトリト數十九ヶ年程在任在任

ニ於テ是レ程病象お生シテ付氣候亦變リ居場所ハ

轉任以テハ一抄考ニ依リテ附屬ニ於テ立退在任

ニ便船方ニ於テ抄考所抽之品ニ日本政府ハ要領申

容存存存存存存存存存存存存存存存存存存存存

一自然抄考死去以テハ其ノ書ケツテ井一後日採取

採可申事

セムスモイトリ

同日田中康太郎母島ハ渡航シ島民千エムシマツレハ

對談ノ上所差出ノ證書便船次第父島ハ報シ来ラハ人数

ヲ分ツテ母島ハ渡航スヘシト豫メ其准備ヲナズ然レモ

一百坪共十一人之内
用布之五五物、付年
七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

一、出極之内本控職忠
精考於古新考、付一
一、出極之内本控職忠
精考於古新考、付一
一、出極之内本控職忠
精考於古新考、付一

禁一人
古用
人
坊

通

一日
一日
一日
一日

一百坪
餘
難

同月中朝陽艦ノ水夫追々ニ死スル者五人各前ニ死者ヲ
埋葬セシ奥村谷川ノ奥ニ埋葬ス

同十月九日五嶋廳吏檢地シテ移民等ハ畑地ヲ割共テ其
地左ノ如シ

一北盛博最子兵鑿出来核付出来及場跡

子八百九十坪此畑亦及三畝ヨ

一口以次川添ニ分十一人ノ割付

一口以子四百ヲ分四坪此畑七百五畝

一口以隣リ地防十一人ノ割付

一口以子四百坪此畑八百

一扇浦西白山畑更望核付出来及分

子四百九於三坪此畑四百九畝ヨ

ノハ子四百七坪

同二十六日魯西亜人指揮役シヨンステンロース曰回蒸

氣運送船ノ水夫ウ井ルリムスミツ曰船ヲ脱走ス因テ小

笠原島中搜索捕縛ノ依頼且曰船中重病ノ者二名快復マ

テノ間上陸加療ノ許可等而條ヲ依頼ス其ノ書如左

一此ト口イ下於テ子八百六於二年茅十二月十七

一日

一此ト口イ下於テ子八百六於二年茅十二月十七

象運送船カントシヨトシンス水夫之内一人ウ井

ルリムスミツ与申志申月十ナリ出来以由シを義木

ルト口イトの全權ハ告知以由出物有テ水夫而據

一方隣濱ノ地ヲ貸與ハ開拓ナセシム其ノ証書

於五人島子八百六十二年庚十二月二十日

一私像又モ一ルビ一ナニ有之在地方一ヶ所日本政府

より持信仕及海軍省所管在在入用之節ハ返シ

可仕也

シヨトヒコルリンス

同十一月十九日先是中濱万次郎鯨漢中心得ノ伺書ヲ出

又本日指揮ノ令有リ

私子附申候万石取以居上候海船ハ
希但小笠原島ノ付中ノ旨付心付

方寄介ノ旨付中ノ旨付

今般成後五村杉濱平野産翁所持船以居上ノ有テ候漢

乃漢乃後私委但小笠原島ノ旨付中ノ旨付

一申上

一平野産翁所持船以居上ノ私委但持信付候漢トナリ

一小笠原島ノ旨付中ノ旨付

一海ノ旨付中ノ旨付

一由帆透自然進程風波ノ船破換等出来等節ハ最寄

形各更取渡ハ入持船掛之止修造等如ハ多様仕交仕

乃ハ其為入用金目指可好至様仕至奉存也

但市札等外買上物等多分ノ相取得候ノ用意ニ

ハ是以前ノ修造出来等節ハ所料等以代為新領

一領主ノ御令立合之上入用候旨外取調等臨場所

一申上候旨等因立修造等如ハ存候仕至奉存也

一近海小島ノ旨付中ノ旨付

戊子十一月十日... 江川右衛門

一、...

及沙地等件同之通知... 戊子十一月十日

申四斗柄之象ハ用是金之内... 正月七日移民及出稼職人等ノ

同三年... 正月七日移民及出稼職人等ノ

休暇ヲ改正

一、百... 付与ノ中付田墾方仕事者多被者行等故一ヶ月之内

同日休息日申渡至... 其付氣候之緩急耕作ノ手続カ之可考ニ付休息

と差定及義ハ取止

一出稼大工市控殿治方若是申了前日休休息乃被等件

休了てハ休事ハ不換取等旨以来ハ朝日十五カ二十

有之通取極矣

同月九日平野船鯨漢トシテ船長中濱萬次郎兼組着港滞

船鯨漢又林和一郎松浪権之丞モ同船シテ出行ケリ此時
小笠原島乾ノ方ニ一小島アルニ至ル全島總テ岩山嶺險

阻更ニ平坦ノ地ナシ島中藤九郎鳥群レテ人ヲ恐レズ鞭
ニテ討拂ヒ行程ニ集リ居ルト云フ各上陸シテ左ノ高札
ヲ建帰レリ此頃鯨魚ニ尾ヲ獲タリ

船長
中濱万次郎

大日本属島
鳥島

文久三癸亥三月二十四日
改建之

松浪推之丞
林和一郎

但シ本品ハ六分板ニハ其ハ
杉赤三枚ニテ差立用意ニテ持参
致矣事

同月二十一日去年十月十日小笠原島ニ於テ在島人ウ井

ルエムギルリ暗殺セラル、ノ旨ヲ訴フニ依リ直ニ其
ノ殺人心当リ探索ヲ命スル云ハ、因循シテ答ヲ為サス
数催促ニ及ヒ結局本日於平野船一門呼出シ相糺ス所左
ノ書ヲ差出ス

於無人島第十一月古ラ口

一ウ井ルエムギルリノ義共々夜何者ヲ新業トモふ
亦分刺傷致され在ヒ物死去仕在付方ハ日埋葬
仕在義共違事所存有、付私在逐一吟味仕在當シ
ヨシケン子トーマススニス西人ニ因ニラ有、為

シヨ一チホーツン
ナスアニールセーヲリ
トーマスエツクウエウ

為證據一曰証名付也

レヨニフヲウヲ一

曰三月十九日亞回、鯨漁船乗組ノ水夫脱走エニ及ニテ
船長ヨリ其ノ者捕縛及ヒ罰罪請求ノ書ヲ小笠原島役廳
ニ差出ス

一 控ポルトロイト子八百六十二年第五月六日

ホルトロイト少領

日本全權参下

君

一 シーエツチデウ井ス、ジヨトジエムスライブルス并

ニアルヘルトルテムスと申三人の水夫松橋様以

毎一原工七ギル名船より出奈以毎一原三付有之若共

以在捕三ヶ月之間居一ノ業以申付以罰法下至其

原在之新南港再至之并介水夫等之戒ニ申申中其

以發替ニ有之其旨を懇願仕也

此下ニ茶種様者

西米利如合衆五之内

ニウベトウヲルト名地仕止之

エビギル名船長

エベンチエフナイ

同月中旬前ニ亞回鯨漁船ヨリ訴出シ三人ノ水夫等自首ス
仍一通り詢問ヲ加フルニ其ノ根原ハ士官ノ苛酷ニ出

ルヲ以テ法ヲ敗ルハ其船法ニ對シ不輕事トイヘトモ
皇國ニ罪アル者ナラ子ハ以後ヲ説諭シ船長カ所請ノ罰
罪ヲ免シ島中滞在ヲ許シ兼テ所定ノ規則ヲ讀渡シ請書
ヲ為サシム

ホルトロイトニ於テ子ハ百六十二年五月
一私苦像工ヒキル船附屬之水吏ニ有クテ島士及之ニ
のヒモ取扱不恒以船長リ出棄論一日本全權ハ巨細
自許法一在幕取遠此以在強ニ渡船長十イキリ法
ニナキ三ヶ月の間日本人之為ニ着意之業及改法戒
律下を以テ以テ西半強至在序共此仁為を以テ免
本報題有等ハ有然ニ此ハ南島在島中西洋人之關係
也一南港規則在守不中

エドモンドエムテウ井ス
ジーエツチステールス
アルベルトルアイムス
同五月朔日同島退帆林和一郎松浪權之丞阿部将翁等乘
組歸府ス
同九日朝陽艦三度小笠原島ハ着港ス先是去年八月二十
一日三郎島津久光後任大隅守勅使護送ノ驛路東海道筋
武州生麥村ニテ其徒士等英人ノ每礼ヲ怒リ斬殺ス是カ
為應接教回遂ニ英國ヨリ教艘ノ軍艦ヲ差渡シ公使驟リ
ニ償金ノ論ヲ主張シ事機ニ依リ兵端ヲモ開クヘキノ景

況ニ至リ既ニ事情迫切ニ及ヒシカハ長崎箱館ホヘモ令
ヲ下シ專ラ兵備ヲ嚴ニシ海防ノ準備ヲ為サシム此時ニ
当リ各回難居ノ離島ハ僅ノ人員ニテ官吏ヲ置且ツ移民
ヲ其終ニ居ラシムルハ釜中ニ奥ヲ放ツニ似タリ加之隅
遠ノ孤島開拓モ容易ナラストノ議論サヘ起レリ是ハ小
笠原島再ヒ開拓ノ議ハ安藤信行ノ主張セシ所ニテ專ラ
其事ヲ裁判ス然ルニ去年四月信行カ職ヲ罷尚ホ十二月
ニ至リ前掃部頭井伊直弼カ領知ノ内十萬石ヲ減シ紀伊
守内藤信親カ所領村替旧地ニ復シ下總守間部詮勝カ所
領一萬石ヲ減シ隱居謹慎若狭守酒井忠義相摸守堀田正
萬及ヒ信行等共ニ整居正萬ハ所領一萬石信行ハ二萬石
ヲ減スルノ嚴令アリ如此柳營ノ處分掌ヲ及ス如シ人権

勢アル時ハ人食之ニ諂媚シ一言半句ノ誑難スルモノナ
ク權勢ナキ時ハ忽チ善事モ惡シク難論スルハ荒季ノ人
情百事役徒ノ指揮セシ事ハ議論アル半ナレハ小笠原島
ノ開拓ハ每益有損也ト評判喋々旁に時モ早引戻スヘシ
ト令シ直ニ擬シテ呂川海ヲ出帆航海本日父島ノ港ニ入
歸府ノ令ヲ傳フ忽卒歸府ノ準備ヲナシ移民等ヲモ引纏
メ先扇浦ノ廳舎及ヒ其他在番諸吏ノ邸宅ヲモ在住ノ島
民ヘ分與フ部屋四房一棟長六間梁間二間半ヲセトホレ
ハ元役所三間ニ二間半一棟物置一棟並ニクセ船一艘共
ニウヘブヘ應接所三間ニ二間半一棟ヲラホトヘ齊藤源
藏住宅二間半二間一棟コルリンスヘ山添大物置七間ニ
三間一棟海岸在来物置一棟共ニレツワヘ平野家三間四

方ノ一棟ヲラホト畔ノ医師宅ニ間半ニ一間一棟奥村ナ
ルシヤトクノ兼太郎居住ニ間四方スミスノ曰人火焚所
シヨージノ板屋百姓家三間半ニ二間ヲラホト二男ハ
外出稼小家鍛冶方小屋物置臺所等五棟境浦ナルゼヨト
セフ奥村ノセヨトテヒジクペハトシヨンカナカ人千ヤ
レ等ノ共ノ其他大形押送船ニ舳舩其帆モ父島セトボレ
ウエフ、ブラホト以上三名ノ共ノ小形ノ漁船舳舩及ヒ舳舩
ヲ添但帆ヲ具セス是ハ母島マツレノ前三名ヨリ傳ノ共
フベキ旨ヲ托シ最前平野船ヨリ買上置シ古ホトト船一
艘ヲモト三名ノ共ノ且米麥合テ二百依程大豆五十苞小
豆十苞水油八樽其外庖厨ノ諸器具等ハ夫々分配スヘシ
ト達シ分配方男一人ノ分配高ノ半減ヲ女子小童男女ニ

至ルマテ人員悉皆ニ分典勿論也ト説論シ尚ホ昨年八月
中セトムスマツレヨリ所取置ノ證書ノ横文ハセトホレ
ト托シ序ニ返シ典フベキ旨ヲモ託シ植付草木培養等ハ
懇ニ遺托ス左ノ保状ヲ出サシム
於ニ見澄子ハ乃十三年芽六月廿七日
一私係利益ヲため扇浦ニおめて地面一ヶ所お借仕
一兼右達世法座為此後日本政府ヲリ所差回省ヲ是
一旁拂申可也
於ニ見澄子ハ乃十三年芽六月廿七日
一日本全權ヲリ松本ノ建築家金科介南島ノ遺残
一其米ヲ諸品貯下至悦ノ以裁估在破船以多一及び

新源寺日中人ハ寺中ニハ便所有ク及テ寺中ニ住持有リ
住持見テ石碑並ニ墓處等ハ寺中ニ在リテ方切ク
寺後ニ住持ハ石碑並ニ墓處等ハ寺中ニ在リテ方切ク
此書島民連署ナルヘケレト小花力筆記中署ヲ脱ス然
ルニ前ニ載スル所ノ書中私共ニ建家食料其ノ外当島
ニ御残ニ相成矣諸品彼下置遣ニ項載仕矣云々ト見ハ
タレハ一名ノ書ナラヌハ論ヲ俟ストイハトモ其名ヲ
知ルニ在樹十ヶレハ姑ク原本ニ隨テ交名ヲ記シ載セ
ス
遠ノ退去頗ル煩雜ヲ極ムトイハトモ兼テ島中蒙置ノ事
件未タ裁判ヲ為サ、ルモアルヲ多忙ニ紛レテ捨出發ス
ハキナラネハ夫々處分ヲ決メ裁判ス其中ニ元アルニル

リシヤムプヘ附属スル處ノ地所トイマスエツチウハ
ブハ讓與ヘシ旨ヲ訴ヘ出タリシヲ未タ許可ノ証書ヲ遍
興サ、リシカハ此時左ノ証書ヲ授ク

於ニ見渡子ハ百六十三年五月廿七日
元アルニルリシヤムヘ屬一ノ地所トイマスエツチ
ウヘフヘ讓與付地所ニ在リテ見渡子トイマスエツチ

日本全權

小花 作 之 助

去年八月江府ヨリノ下知ニヨツテ田中康太郎立合セ
ムスマツレシヨリ證書對照ノ上横文ヲ取置シカトモ今
般在勤一曰引拂ノ台命アルニ因テ官廳ニ預リ置シ本書

ヲ交還スヘシトセムスマツレヲ徴出シ序ヲ以テ本人
マツレシヘ其ノ旨ヲ傳達シ返シ典フヘシト演達シ左ノ
翻譯文ノ原書横文ヲゼムスニ委託ス
子八百六十二年芽九月廿七日
日本政府役人
抄セムスマツレシ義十九ヶ年程在島居在然不
處此程疾病有患有之付氣候有變有始シハ極危以毎一
才抄抄抄抄之品ニ日本政府ハ其拂申至存有也心在傳
二子トルラルハ有之
自然抄者死去以毎一
了申

總テ移民共ノ開拓スル地既ニ八千坪ニ及ヘリ是モ食在
島外國人ニ委ネ事全ク整ヒ小花作之助益田鷹之助原又
吉堀一郎及七八丈島ヨリノ移民男女トモ引掛ノ準備速
ノ事ニテ百車忽卒也トイハトモ漸調度ヲ取揃ヘ門十三
日芽十二時小笠原島出帆日十九日朝八時浦賀着港翌廿
日歸府ス
日七月伊豫守菊池隆吉稟状ヲ捧ケテ小花益田松浪ノ三
士及ヒ雇醫師阿部将翁等ノ賞典ヲ請フ
小笠原島
仕

造之義也口人有人皆古法以多一進之由益、不其本
中少掛一少年之習不自由難若山在歐格勒作也、付水
野下總守一曰訪也、寄命、醫師、萬畝、領小野、苓庵、
乙為、以、舊、美、金、也、枚、時、信、二、日、訪、下、有、方、將、翁、儀、弟、勿、力、道
古、以、見、念、三、以、古、本、重、之、修、七、小、事、業、三、於、丁、勤、切、報、昔、也
苓、庵、今、力、也、古、修、者、也、義、三、付、在、古、尚、之、以、舊、美、訪、下、至、也
標、休、至、奉、存、也、依、之、以、能、奉、報、也、以、上
亥、与、月

同十一月下野守竹内保德伊豫守菊地隆吉連署三小笠
原島開拓費用ノ殘金未算當決セズトテ先金藏へ返
納セシテ請フ

小笠原島開拓費用ノ付諸取及用
意金並ニ洋銀片ニ納メ義中ニ奉付

竹野守
菊池伊豫守

洋銀片三万五兩五分八拾三文

一金万二千三百拾五兩九文

分金五千九百九拾四兩八分九厘

洋銀片七万八千三拾五兩

一洋銀七万三千五拾一兩三十四分

分洋銀四千九百八拾五兩十六分

有於小笠原島開拓費用ニ付先般水野下總守昭長

門方所賦之節用之金也、
昭長代筆之共成、八月廿八日島より福民并、出極大

又本控殘書七通差洋之節、決、用、之、高、取、用、之、求、具、農

具伐柘家分法品海軍之代且川昨年来於小笠原島在
島之傍入下取柘分西人一治下品法買以代産修派
等之並拂及好銀七九右等之廣之巨細肉淨艦取油中上
在積一之下累子取調市七出来寄及滿此程之等六之
右等類不淨燒失估至之付桶取油方八進之可估及好其
一時急達之何分分及好及等只又波崎一被等
後之之内淨銀等好被中下ルル通用之少地銀之賜
方之善支及之付一時掃抄相好乃估及分七布之好其淨
府治子之通納万取纏及及等之九好及物價以五肉
与道以不并之止核到其價之島之万難泥付及少治之少
給之否と七之通納方進引之右被給之當右之介好淨
リ右等海軍淨銀七九善肉以通有之用道三井八路右好

其の市一被至及好其程ハ人宅燒失仕メリ手落之掃抄
一善至及七此等柄好念之与申出及九之次才之七等
其拂及巨細肉淨帳之義ハ取調出来治才不申出^上及好其
善肉之善言此等好至善一之納付及此及治動定奉好
波作海可治下及好之此限申上及以之

亥十一月

同日十五日酉刻前江城本丸潮見坂番所後留守居番部
屋取飯方詰所ヨリ出火本丸及七二丸
時ニ火核猛火燭々消防ノ術無ク大將軍モ吹上ハ勤坐車
急ニシテ奥向ノ宝物重置ヲ始調度雜品多クハ灰燼ニ屬
シ中ニモ惜ムヘキハ諸有司ノ各局ニ備置ケル古今ノ書
史内外ノ記録往復ノ書讀等日勤ノ諸吏退散ノ後僅ニ宿

衛ノ昔而已火焰ヲ潛リ烟ヲ吞ミ千辛万苦持出スモノ若
干也ト虽氏尽クスル間ナク祝融ニ罹ルモ歎カラス小笠
原島ニ関係ノ書類ハ一葉半紙モ残ルモノナク僉焉有ト
ハナリシ也小笠原島開拓再興ノ台命アリテ其ノ事務ニ
関ル者ハ南島掛ト唱ハ一課ヲナシ彼島嶼ニ係ル事件ハ
内外ノ往復ヲ始メ大小ノ事務尽ク南島掛ニテ取裁スル
ヲ以テ各国公使領事等トノ往復書翰取扱記及ヒ書翰通
等モ別冊ト為シ外國事務平常ノ記録ト合綴セサリシカ
ハ今小笠原島事件ノ書類ノ傳ハラサルハ此火ノ災ニ因
テ也抑江城祝融ノ災厄アル事本西両城總テ十一度當城
基立ノ權輿ヲ温ルニ
後花園天皇ノ長祿元年 明天順元年 鎌倉ノ管領修理大夫
洋千四百五十七年

上杉定政カ長臣无衛門大夫太田持資入道道灌創テ築城
以後連綿今ノ東京城則是也先是道灌ハ当国荏原郡呂川
ノ館ニ在シカ此頃関東蜂ノ如ク乱レ下總ニハ下野守東
常縁兵ヲ起シ陸奥入道馬加光輝ヲ討伐セント馬加ノ城
ヲ攻メ上総ニハ武田入道兵ヲ萃ケ廳南鞠谷ノ両城ヲ經
營シ楯籠テ國中ヲ押領ス安房ニハ刑部少輔里見義実中
村ノ城ニ在テ隣国騷擾ノ慮ヲ窺ヒ国境ニ兵ヲ出シ所々
ヲ侵害ス築田河内守ハ関宿ヨリ討出武州足立郡過半ヲ
所領トシ市川ノ城ヲ兼取り兵ヲ籠置尚ホ近境ノ形勢ヲ
覲踰ス上杉方ニモ三浦介義固ハ本貫三浦ヨリ起テ相模
国岡寄ノ城ヲ取りテ近郷教ヶ所ヲ押領シ大森安齊ハ竹
ノ下ヨリ起リ小田原ノ城ヲ取立足柄郡ノ地ヲ畧ス又ク

武州ニテハ上杉武藏入道性順其ノ胃右馬助房憲父子人
見ハ討出上杉ノ味方ト謀シ合セ深谷ニ城ヲ築シカハ左
馬頭成氏之ヲ聞驚愕大事也敵ニ足ヲ溜サスヘカラスト
鳥山右京亮高山因幡守等ヲ先鋒トシテ出張サセシム上
杉モ勢ヲ岡部原ヘ繰出シ烈シク闘戦ニ及セシカトモ
遂ニ上杉方敗レ井草左卫門尉ヲ始久下秋元ノ人々其他
ノ逞兵残少トニ討テサレ成氏方モ軍ニハ勝タレトモ大
将鳥山モ深予ヲ負ヒ乱軍ニ討死シケレハ軍ハ是迄也ト
引返ス上杉方ハ新田岩松小五郎金井新左卫門以下新午
如リ再度ノ合戦ニハ成氏ノ軍敗北足立ノ部ヘ引返ス如
此西野房總武相ノ六国一時ニ修羅ノ衢トナリ何時不虞
ノ變アラシム計リ難シト修理大夫上杉持朝入道ハ武州

入間郡川越ニ城ヲ築キ道灌カ父備中守資清入道道真ハ
曰国崎玉郡岩槻ニ城壘ヲ營ミシカハ曰時道灌モ豊嶋郡
江戸ニ城地ヲ闢テ康正二年經營ニ係リ翌長祿元年四月
ニ至リ落成此時河越岩槻兩城モ全ク成功シタリケニ録
倉大双紙ニ曰時築城ノ事ヲ載タルヲ以テ和ルニ足レリ
却說道灌ハ新築ノ江戸城ニ移リ此ニ居ル事三十年城中
ニ燕居ノ室ヲ造營シ南軒ヲ靜勝ト号ケ東軒ヲ泊船ト呼
ヒ西軒ヲ含雪ト称フ道灌ハ文武俱ニ長シ志モ優美ク和
歌ヲ善ク詠タリ家ノ集ヲ慕景集ト号ク斯文事ヲ好ムヲ
以テ万里居士ヲ江戸ノ城ニ招キ入居士山水ノ眺望ヲ称
揚シ窓含西嶺千秋雪門繫東吳万里舟ト古人ノ詩ヲ引其
ノ美景ハ江亭記中ニ見エタリ此年間扇ヶ谷ノ上杉定政

山ノ内ノ兵部少輔上杉房頭互ニ権ヲ争ヒ間計ヲ以テ定
政ニ道灌ヲ疑ハシム定政思慮薄ク其ノ間計ニ陥リ人ヲ
シテ道灌ヲ浴室ニ刺シム是文明十八年其ノ後定政カ子
内氏五郎朝長曰修理大夫朝興共ニ相續キテ江戸城ニ居
リ専ラ隣国ニ窺ハレシト守リシカトモ
後拍原天皇ノ大永四年明嘉靖三年 洋千五百二十四年正月十三日左京大夫
北條氏綱カ為ニ落城シ朝興ハ川越ニ敗走ス自是後ハ氏
綱カ富永神四郎遠山四郎左衛門等ヲ城代トシテ此ニ居
ラシム氏綱カ男左京大夫氏康其ノ男左京大夫氏政其ノ
男左京大夫氏直ニ至ルマテ四代ノ間ハ北條家ノ持城タ
リ此間遠山富永両家守リ居タリシカ
正親所天皇ノ永祿七年明嘉靖四十三年 洋千五百六十四年太田新六郎康資

兄弟小田原ニ叛キ曰苗美濃守資正入道三樂齋ニ謀シ合
セ安房守里見義弘ト曰シ下総国市川ノ城ニ楯籠リシカ
ハ北條ヨリノ討手トシテ遠山丹波守富永三郎左衛門北
總国府臺ニ向ヒ進軍其ノ因ヲ失ヒ却テ敵ノ計策ニ陥リ
二人共ニ討死ス然レトモ氏康父子小田原ヨリ馳来リ大
ニ鬪戦シ三樂義弘敗シ北條ノ軍勝タリシカハ江戸ノ城
ハ異ルヲナク小田原ヨリ之ヲ守リ北條治部丞遠山左工
門等城代ヲ勤ム
後陽成天皇ノ天正十八年明萬曆十八年 洋千五百九十年豊臣太閤兵ヲ出
シ北條カ居城小田原ヲ攻ム此時遠山左工門佐景政ハ小
田原ニ籠城シ其ノ弟河村兵部少輔曰甥遠山丹波守江戸
城ヲ守リ居シカトモ北條家没落シ関東八ヶ国ヲ徳川氏

ノ所領ニ興ヘラレ江戸ヲ居城ト定メ同年八月朔日入城
アリシ也事跡合考ヲ考フルニ江戸ハ海端ノ沁入田畑ナ
トハ僅ニテ凡ソ八百石許ノ費也ト家康平日ニ自負セラ
レシト見エ岩淵夜話別集ニモ此ノ事ヲ記セリ友人旧幕
臣伴直剛カ家藏ニ享祿年間江戸城ノ古板アリ何者カ天
保ノ未此図ニ坐作意ヲ加ヘ是祿江戸図トスルモハ徵
トスルニ足ラネト直剛カ藏スル古板ハ江戸城ノ往昔ヲ
見ルニ足レリトスヘシ其頃マテハ市街トテモ備ハラヌ
回辺原野渺茫村落疎也天正入国以後日ヲ重ネ月ヲ追ヒ
天下ノ諸侯此ニ参勤シ藩邸薨ヲ並ヘ市鄼ノ家屋鱗差シ
テ縦横ノ四街八百町斯ク繁昌ノ地トナルニ從ヒ柳營ノ
殿舎漸々ニ造営セラレ本丸二丸三丸西城等大厦高堂陸

續ト建列リ且内宮御
明正天皇ノ寛永十一年明宗禎七年閏七月廿三日軒遇突
智ノ神ノ荒暴マリテ本城火ノ災ニ灰炆ト為レリ長祿元
年当城創築ヨリ此年マテ百三十四年ノ間祝融ノ有無ヲ
記録スルモノ益レハ詳ナラネト入城以後四十二年ノ間
ニ火ノ災ナカリシハ確也然ルニ僅六年ノ後曰十六年八
月十八日又火アリ夫ヨリ十九年ヲ過
後明曆三年明曆三年明永曆十一年正月十八日本郷丸
山本妙寺坂辺ヨリ出火此火ノ為メニ本城厄災ニ罹リ又
九十年ノ後
櫻町天皇ノ延享四年清乾隆九年今年五月
皇太子ニ御讓位アラセラレ

桃園天皇御代ヲ知シ食シカトモ未タ御位讓ヨリ以前四月十二日西城ニ火アリ其ノ後九十五年ヲ隔仁孝天皇ノ天保九年清道光十八年三月十日西城又祝融ノ災アリ之ヨリ七年ノ後
 仁孝天皇ノ弘化元年清道光二十四年五月十日本城火災ニ罹リ九年ノ後
 孝明天皇ノ嘉永五年清咸豐二年五月廿二日西城ニ火アリテ殿舎灰燼日十一月廿八日富士見宝藏出火シ又々八年ノ間ハ然ル災モ無カリシカ
 日御宇ノ安政六年清咸豐九年十月十七日本城中ノ口ノ辺ヨリ出火シ倉烏有ト為リ又五年ノ後則本年文久三年六月三日芝飯倉五町目辺ヨリ出火其ノ火飛テ西城ヲ焼キ六

ケ月ノ後今度ノ本城ノ祝融ニ至リ本西ノ二城ニ九サハニ焼シカハ一先清水ノ館ニ入ラレ日十一月廿六日田安ノ屋形ニ滯坐アリシ也

元治元年清日治二年ニ至リ再ヒ外國奉行連署シテ建言ス

南海小笠原崎取作向
 義ノ休中ト云々付
 介 國 奉 以

小笠原崎ノ儀ヲ去ル西年十二月申野籠守目付
 務能降一等出陣格ヲ請差登御名回公儀ハト生々
 觸達抄奉既ニ西英公使等ヨリ日島版圖ノ義ヲ付種
 申出テ義有リテ將テ諸島此方新規出展格ニ奉差義
 有先鞭を治乃善也安ニ申渡方五分ノ弱多所多事

